

Title	<生きられる共時性>と<同時性>
Sub Title	
Author	鳥越, 信吾(Torigoe, Shingo)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2014
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.19 (2014. 7) ,p.139- 140
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大会報告要旨
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20140705-0139

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〈生きられる共時性〉と〈同時性〉

鳥越 信吾

社会学はその誕生以来、大きく以下ふたつの視角から「近代的時間」を対象化する方途を模索してきた。第一に、時間と貨幣との間の関係に資本主義発生の契機を見出した M. ウェーバーや「時間と空間の分離」をめぐる A. ギデンズの所説に端的に見られるように、社会学における時間研究の多くは、それまでは普遍的なものであるとみなされてきた直線的で計量可能、不可逆的な時間が、じっさいには近代の産物であるということを明らかにしてきた (Weber [1905] 1920= 1989; Giddens 1990= 1993)。また第二に、たとえば「ハビトゥス」と呼ばれる身体に積み重なる時間を提示する P. ブルデューや、日常生活者が「繰り返す時間」のなかを生きていることについて指摘するギデンズ、実践の多元性と時間の多元性とを相関的に捉える D. ハーヴェイなど、社会学における時間研究の多くにおいては、そうした近代の産物としての「近代的時間」が、唯一の時間ではないことが主張されている (Bourdieu 1977= 1993; Giddens 1987= 1998; Harvey 1990= 1999)。

上記のようにこれまでの社会学における時間研究を整理すれば、真木悠介の『時間の比較社会学』(真木 [1981] 2003: 以下『時間』)は、そうした流れのなかに正しく位置づけられ、検討されるべき著作であるように思われる。というのも、まさしく『時間』の行論は、「近代的時間」が近代とともに存立していく過程を説明し、それについての批判の契機としての「近代的時間」とは別の時間を近代のなかに探究していくものだからである。本報告の目的は、『時間』を上記のような学説史的な文脈に位置づけ、同書の意義と課題とを明示することにある。

本報告は大きく三つの節から成る。第一節では、この作品を近代的時間についての〈説明〉と近代的時間への〈批判〉という二つの理路に区別し、それぞれのなかでどのような議論がなされているのかを次のように確認した。すなわち、前者〈説明〉の理路においては、近代的時間の存立構造と、それの人びとにとっての経験のされ方の説明が企図されており、後者〈批判〉の理路においては、近代的時間によって不可避的に帰結される「時間のニヒリズム」からの解放の契機を、近代のなかに見出していくことが目指されているのである。次いで第二節では、『時間』の意義と課題とが明示された。まず本報告は、『時間』とギデンズの所説とのあいだの比較を行い、それを通して『時間』の意義を、近代的時間がいかにして近代の産物であるかということを徹底的に〈説明〉している点に求めた。他方、『時間』の課題は、近代的時間への〈批判〉の契機として提出された「生きられる共時性」という概念のもついくつかの不十分さに存することが示された。

本報告第三節では最初に、『時間』において提出されている「生きられる共時性」概念が、

A. シュッツの「同時性 (Gleichzeitigkeit) 」 (Schutz [1932] 2004: 225) という概念と相同的な事象を指すものであることを論証した。そのうえで本報告は、「生きられる共時性」概念をシュッツの理論枠組みでもって精緻化していくいくつかの可能性を、既存のシュッツ研究を手引きとしつつ示唆した (Barber 1991; 那須 1999; 石原 2009)。それらは端的に言えば、「生きられる共時性」と「同時性」の概念が、それぞれ『時間』とシュッツ理論において有する位置づけに関わるものである。すなわち、『時間』の議論は、近代的時間への批判の契機としての「生きられる共時性」の析出を到達点として終わっている。これに対して、シュッツの関心は、「同時性」の明確な規定をあくまで出発点として理論展開を行なうことにあつたのである (Schutz [1932] 2004)。このような両概念の位置づけの相違をふまえ、本報告は最後に、『時間』の議論を更に展開するための可能な方途の一つとして、「『時間』が終わるところから、シュッツの理論を始める」 (cf. Schutz= Parsons 1977= 1980) ことの有効性を主張した。

【文献】

- Barber, M., D., 1991, "The Ethics behind the Absence of Ethics in Alfred Schutz's Thought." *Human Studies*, 14(2): 129- 140.
- Bourdieu, P., 1977, *Algérie 60: Structures économiques et structures temporelles*, Paris: Éditions de Minuit. =1993. 原山哲訳『資本主義のハビトゥス：アルジェリアの矛盾』藤原書店.
- Giddens, A., 1987, *Social Theory and Modern Sociology*, Polity Press. =1998. 藤田弘夫監訳『社会理論と現代社会学』青木書店.
- , 1990, *The Consequences of Modernity*, Stanford University Press. =1993. 松尾精文・小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か? : モダニティの帰結』而立書房.
- Harvey, D., 1990, *The Condition of Postmodernity: An Enquiry into the Origins of Cultural Change*, Cambridge MA & Oxford UK: Blackwell. = 1999. 吉原直樹訳『ポストモダニティの条件』青木書店.
- 石原孝二. 2009. 「他者と時間：シュッツの他者論とフッサール、ベルクソン」『哲学雑誌』124: 1-14.
- 真木悠介. [1981] 2003. 『時間の比較社会学』岩波書店.
- 那須壽. 1999. 「社会学的概念を厳密化し根源化する試み：社会関係概念を手がかりに」『早稲田大学大学院文学研究科紀要. (第 1 分冊)』45: 111-127.
- Schutz, A., [1932] 2004, *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt*. in *Alfred Schütz Werkausgabe II*. UVK. =2006. 佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成』木鐸社.
- Schutz, A., und Parsons, T., 1977, *Zur Theorie Sozialen Handelns: Ein Briefwechsel*, Martinus Nijhoff.= 1980. 佐藤嘉一訳『シュッツ＝パーソンズ往復書簡集：社会理論の構成』木鐸社.
- Weber, M., [1905] 1920, *Die protestantische Ethik und der 'Geist' des Kapitalismus*, =1989. 大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店.
- (とりごえ しんご 慶應義塾大学大学院社会学研究科)